

## W-5. Botany Bay

ジェームズ・クック (1728-1779) は、イギリスの海軍士官、海洋探検家、海図製作者で、通称キャプテン・クックと呼ばれ、世界一周航海を3回おこなっています。第1回航海は、1768/8/25にプリマスを出航、ホーン岬、タヒチ、ニュージーランドを経て、1770/4/19にオーストラリアの東海岸に出会い、海岸沿いに北上、4月28日にボタニー湾の入口を発見し、5月5日まで滞在しています。

ボタニー湾は、クックの航海に同行した2人の植物学者バンクスとソランダーが、この地で多くの新植物を発見し貴重な植物標本を持ち帰ったことから、植物学湾 (ボタニー湾) と名付けられました。

クックの航海の後、1775年にアメリカ独立戦争が起こり、1776年にアメリカが独立します。イギリスは、囚人を収容する場所としてアメリカ植民地を失ったため、クックの報告書から、新しい流刑地の候補地としてボタニー湾を特定しました。そして1780年、最初の開拓移民として730人の囚人と250人の一般人がこの湾に上陸しました。

この歌の主人公は路上で警官を殴って警棒を奪った罪で、オーストラリアへ島流し。悔悛の情と共に、祖国を懐かしみ、恋人を思い、若者に自分のようなまねはするなと戒めるのです。(24)

## W-6. The Fields of Athenry

この曲は、1840年代にアイルランドを襲った大飢饉のさなか、食料を盗んだ罪で捕らえられた人々がボタニー湾に送られたという史実を題材とし、1979年につくられました。

歌詞は、飢えに苦しむ家族のために一人の男がイギリス貴族の大地主、トレヴェリアンの畑からトウモロコシ (ここでは穀物一般を指します) を盗んだため、監獄に入れられ、やがて愛する人と別れ、流刑地の豪州ボタニー・ベイへ移送されるという内容です。

この曲は、アイルランドの人々にとってはサッカーなど、スポーツの応援歌として広く歌われています。そうなった経緯は、次のように説明されています。

セルティック・フットボール・クラブは、スコットランドのグラスゴーを本拠地とするプロサッカークラブで、地元グラスゴーの人だけでなく、アイルランドやスコットランドのアイルランド系の人々の間で多くの支持を得ています。というのも、1840年代のアイルランド大飢饉の際、10万人のアイルランド人をグラスゴーは受け入れてくれました。

セルティックで長く活躍したアイルランド人ゴールキーパー、パッキー・ボナーが1991年にテストimonialマッチを行った際、この歌の作者ピート・セント・ジョンをイベントに招待しました。試合前の観客に向けてのスピーチで、セント・ジョンはまず、飢饉の犠牲者を世話してくれたグラスゴーに感謝し、何千人ものファンとともに「フィールズ・オブ・アセンリー」を演奏しました。

これがきっかけとなって、アイルランドのスポーツの応援歌となったのです。

## 2. 十三の砂山 青森県津軽民謡、編曲：篠田昌伸

青森県十三湖 (じゅうさんこ) 辺に伝わる唄で、市浦村十三の盆踊り唄と言われています。十三 (じゅうさん) 村 [現在は五所川原市の一部] は、元禄13年までは「とさむら」と呼ばれており、北前船が若狭を経由して松前に通う際、本州の一番北に位置する十三港は重要な寄港地でした。

海が荒れ出帆できず、十三港に長く滞在していましたが、いよいよ風もよく松前に向けて船出するのですが、土地の人の厚情に触れてきて、別れがたくて涙も出た、と歌います。

十三の砂山、ナア、ア、ヤーエ、米なら良かるナ 西の弁財衆にや、ただ積みしよ  
沖の暗いのは、ナア、ア、ヤーエ、蟹田の嵐ナ 親父、帆を巻け、舵も取れ  
十三を出る時や、ア、ヤーエ、涙で出たがナ 尾崎かわせばーエ 先や急ぐ  
ツツジ椿はナア、ア、ヤーエ、山で咲くがナ 今は十三船の鞆で咲く

(定演24のプログラム)

ニューズレターNo.149の本間さんの記事も参照して下さい。

### L-3.ダンチヨネ節

大正から昭和にかけて、主に酒席で流行した歌。作曲者および作詞者は不明。日本の神奈川県三浦市三崎町を中心に広まり、神奈川県のみならずとされる。また、これをもとにした替え歌なども知られている。

各節の最後に入る囃子詞「ダンチヨネ」は、漁師の掛け声とも「断腸の思い」から来ているともいい、語源に諸説あってははっきりしない。

民謡としての「ダンチヨネ節」は船乗りの悲哀を歌っており、その節を使って色々な替え歌が作られた。東京高等商船学校の学生によって愛誦され、また軍隊でも唄われるようになった。

東京高等商船学校に関しては練習船月島丸の遭難（1900年、学生79名を含む122名全員が消息不明）と関連付ける説があり、その後継となった大成丸を歌い込んだ歌詞も伝えられる。

戦後には、小林旭の吹き込みによる「アキラのダンチヨネ節」（1960年発表、作詞：西沢爽、作曲：遠藤実）がヒットした。八代亜紀のヒット曲「舟唄」（1979年発表、作詞：阿久悠、作曲：浜圭介）にもダンチヨネ節が歌い込まれている。（Weblio）

須藤さんにお借りした「檣壽歌集」は、昭和36年に始まった日本寮歌祭に始まり色々な場で採集された船乗りの歌、寮や練習船で愛唱され歌い継がれた曲を73曲収録しています（2004年刊行）。

ダンチヨネ節のページを別ファイルでお知らせします。

### L-8. (初演)浜辺の歌

浜辺の歌は、作詩：林古溪、作曲：成田為三による日本の唱歌・歌曲。大正5年（1916年）発表。大正時代初期に作詞された歌詞だけあって、文語調で若干難解な表現が散見される。

あした浜辺を さまよえば 昔のことぞ しのばるる  
風の音よ 雲のさまよ 寄する波も 貝の色も

ゆうべ浜辺を もとおれば 昔の人ぞ しのばるる  
寄する波よ かえず波よ 月の色も 星のかげも

はやちたちまち 波を吹き 赤裳（あかも）のすそぞ ぬれひじし  
病みし我は すべていえて 浜の真砂（まさご） まなごいまは

(worldfolksong.com)